

観点別学習状況における 「主体的に学習に取り組む態度」の評価に関する研究

— 小学校国語科におけるルーブリックを活用した実践を通して —

小島 俊祐¹

令和2年度から全面実施された小学校新学習指導要領において、指導と評価の一体化の観点から学習評価のより一層の充実が求められている。本研究では、学習評価の課題として指摘されてきた「関心・意欲・態度」の評価の難しさを踏まえ、評価規準と評価の判断基準を定めたルーブリックを開発・活用することが、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の妥当性・信頼性を高めるために有効な方策となるかを検証した。

はじめに

平成28年12月に中央教育審議会は、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」(以下、「答申」という)において、目標に準拠した評価を更に進めていくために、観点別学習状況の評価の観点を「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点到整理すると示した(中央教育審議会 2016 p.61)。

また、平成31年3月に示された「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(通知)」(以下、「通知」という)では、「指導と評価の一体化の観点から、新学習指導要領で重視している『主体的・対話的で深い学び』の視点からの授業改善を通して各教科等における資質・能力を確実に育成する上で、学習評価は重要な役割を担っている」(文部科学省 2019 p.2)と示されている。

しかし、学習評価をより一層充実させるためには、改善すべき課題があり、「通知」では、「主体的に学習に取り組む態度」に改められる前の「関心・意欲・態度」の観点について「性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭しきれていない」(文部科学省 2019 p.3)と指摘されている。誤解の原因として考えられることは、そもそも「関心・意欲・態度」の評価対象が抽象的な概念だということである。このような見取りにくい対象の実現状況を観点別学習状況として評価すること自体に難しさがあると考えられる。

平成29年度文部科学省委託調査「学習指導と学習評価に対する意識調査報告書」において、『関心・意欲・

態度』の評価の妥当性を担保することに苦勞する」の項目に対して、「そう思う」及び「まあそう思う」と回答した小学校教員の割合が76.4%であった(株式会社浜銀総合研究所 2018)。このことから課題があることは明らかである。

これらのことから、観点を誤解を払拭することだけを目指すのではなく、見取りにくい対象を評価するための評価の判断基準の設定と、評価の妥当性・信頼性を高める具体的な方策を講じる必要があると考えた。

研究の目的

「主体的に学習に取り組む態度」に対して、評価の妥当性・信頼性を高めるための方策について、実践を通してその有効性を検証し、学習評価の充実に資する。

研究の内容

1 研究の背景

(1) 「主体的に学習に取り組む態度」について

「答申」において、観点を趣旨が示されている(中央教育審議会 2016 p.62)。

子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしていたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。

「主体的に学習に取り組む態度」は独立した観点として評価するのではなく、「知識・技能」、「思考・判断・表現」と関連付けて評価することが強調されている。しかし、観点を趣旨についておおよそのイメージはできるが、評価対象が抽象的な概念であることは「関心・意欲・態度」と変わらないため、根本的な評価の難しさは変わっていない。

これに関して村山は「現時点で主体的に学習に取り組む態度の評価が難しいのは、教育目標もその評価も抽象的なレベルで考えているからだろう。つまり、具

1 厚木市立清水小学校

研究分野(今日的な教育課題研究 学習評価に関する研究)

体的な単元を対象として、具体的な学習者を想定しながら、教育目標、指導方法、学習評価を具体的に検討しなければならない」(村山 2020)と述べている。

確かに、具体的な授業場面を想定し、実践を通じた検討をすることは必要である。さらに、学習評価の検討を行うためには具体的な評価規準と評価の判断基準の設定が必要であると考えた。

(2) 所属校の現状

所属校の教員を対象に学習評価における実態を把握するため、検証授業前に質問紙調査を行った。その結果から、評価方法・評価計画・評価の判断基準について、同学年担当教員で検討している教員が多いことが分かった。しかし、「関心・意欲・態度」や「主体的に学習に取り組む態度」に関する設問で、「根拠をもって説明はできるが、その根拠が妥当かどうかと言われると不安」、「具体的な数値などで出せない評価であるので、判断基準が曖昧な点がある」などの記述があり、教員が難しさを感じていることが分かった。

これらのことから、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について妥当性・信頼性を高めるとともに、この観点について教員が抱えている難しさを解消できる具体的な方策を講じる必要があると考えた。

2 研究の内容

本研究では、「主体的に学習に取り組む態度」の観点について妥当性・信頼性の高い評価を行うために第1図のように、ルーブリックの開発・活用を行った。



第1図 ルーブリックの開発・活用

田中が「質的な『基準づくり』の方法として登場してきたのが、ルーブリック(評価指標)という考え方である」(田中 2004 pp. 81-82)と述べていることから、意思的な側面を質的に捉えて評価する「主体的に学習に取り組む態度」の基準作りへの運用が可能であると考えた。そこで、「主体的に学習に取り組む態度」の観点の評価の判断基準を明確化するルーブリックを開発することとした。(以下、本研究におけるルーブリックは観点別学習状況の評価指標を示すものとし、評価規準と評価の判断基準を定めたものとする。)

(1) 妥当性・信頼性の定義

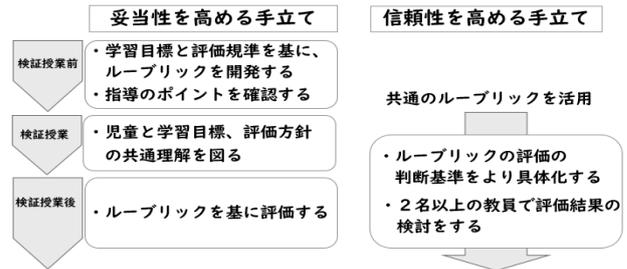
本研究における「妥当性」、「信頼性」とは次の定義を活用する(田中 2004 p. 83)。

「妥当性」…目的としている評価対象をどれほどよく評価しているのかを示す概念

「信頼性」…その評価のあり方が評価しているものをどの程度一貫して評価しているのかを示す概念

これを基に、本研究では「妥当性」を「ねらった学

習目標に対する実現状況を適切に評価しているか」、「信頼性」を「誰が評価をしても同じ評価になるか」と定義し、以下の方策を講じることにした(第2図)。



第2図 妥当性・信頼性を高める方策

「通知」では、「学習評価の妥当性や信頼性が高められるよう、学校全体としての組織的かつ計画的な取組を行うことが重要である」と示されている。その取組例として「評価規準や評価方法を事前に教師同士で検討し明確化すること」が挙げられている(文部科学省 2019 p. 5)。

しかし、先述の所属校の現状から「主体的に学習に取り組む態度」の観点について、評価規準、評価方法の検討だけでは足りないと考えた。このことから、評価の妥当性・信頼性を高めるために、次のようにルーブリックの開発・活用を行った。

(2) ルーブリックの開発

「主体的に学習に取り組む態度」の評価の妥当性・信頼性を高めるために、評価規準と評価の判断基準を定めたルーブリックを開発することとした。しかし、ルーブリックを作成するには時間と労力がかかることが課題として指摘されており(松下 2007)、負担軽減のための方策も必要である。そこで、新たに一から作成するのではなく、学習評価を行う際に設定する評価規準を基にルーブリックを開発した。

検証授業前は、評価規準を設定するために新学習指導要領を基にルーブリックを作成し、検証授業後に行う評価結果の検討を重視することで、個人で悩む時間を削減し、負担軽減を目指した。

また、ルーブリックは児童提示用も開発し、教員と児童で評価方針の共通理解を図ることとした。

(3) ルーブリックを活用した授業計画

ルーブリックで設定した評価規準と合わせて、評価計画と指導のポイントを確認するツールとして単元計画シートを開発し、使用した(第3図)。



第3図 単元計画シート

検証授業前に、単元計画シートを用いて「③評価計

画と指導のポイント」を可視化し、同学年担当教員で共通理解を図り、ねらいとする評価規準と評価の判断基準が妥当であるかを確認した。

(4) ルーブリックを活用した評価検討会

評価の信頼性を高めるために、検証授業後に、児童の具体的な学習の姿や学習成果物を基に評価の判断基準をより具体化し、ルーブリックを基に評価結果を検討する、評価検討会を行う。

また、評価の判断をする際に共通のルーブリックを用いて同じ評価対象を評価したとしても、判断する教員によって評価結果が異なることが考えられる。山口は、評価の信頼性を高める手段において、個人ではなく、少なくとも2名による確認でも、その評価の信頼性が格段に向上すると述べている(山口 2013)。このことから、個人で判断するのではなく、複数の教員で判断することで評価の信頼性を高められると考えた。

3 研究仮説

本研究では次のような研究仮説を立てた。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価活動において、評価規準と評価の判断基準を定めたルーブリック(評価指標)を開発・活用することで、評価の妥当性・信頼性を高めることができる。

4 仮説の検証方法

前述の研究の内容に沿ってルーブリックの開発・活用をし、次の方法でデータを収集した。

(1) 教員対象

所属校全教員を対象に検証授業前・後の質問紙調査と検証授業(公開授業)・研究協議会を実施した。さらに、第6学年担当教員を対象に評価検討会を実施した。

(2) 児童対象

所属校の第6学年児童を対象に、「主体的に学習に取り組む態度」を評価するためのルーブリックを活用することが、児童にとって、主体的に学びに向かう意識の向上に有効であるかを確認するため、検証授業前・後の質問紙調査を実施した(第1表)。

第1表 検証実施日

実施日	教員対象	児童対象(第6学年)
9月25日(金)	事前質問紙調査 n=36	事前質問紙調査 N=127
10月19日(月)	検証授業(公開授業) 研究協議会	
10月23日(金)	事後質問紙調査 n=35	事後質問紙調査 N=125
10月28日(水)	第6学年担当教員 評価検討会	

(3) 検証授業の概要

単元指導計画は第2表のとおりである。

第2表 単元指導計画

時	ねらい	☆指導に生かす評価 ★記録に残す評価 【中心となる評価場面】
1	学習の見通しをもつ。	☆伝統的な日本文化への興味・関心をもち、学習の見通しをもっている。【ワークシート】

2	筆者の文章表現の工夫に気付くことができる。 【教材：『鳥獣戯画』を読む】	☆文章表現の効果に気付いている。 【ワークシート】
3	魅力を伝えるための文章構成の工夫に気付くことができる。 【教材：『鳥獣戯画』を読む】	☆筆者の伝えたいことを伝えるための資料の使い方と文章構成の工夫に気付いている。 【ワークシート】
4	引用を使った効果的な記事の書き方を理解している。	☆引用を使った効果的な記事の書き方を理解している。【ワークシート】
5	資料を読んで自分が伝えたい情報を決める。	☆テーマから何を発信したいかを決めている。【ワークシート】
6	資料で見つけた情報と自分の考えをメモすることができる。	★資料を読んで知ったことと自分の考えたことを書いていく。(知)【ワークシート】
7	伝えたいことが伝わるように割付を考えることができる。	☆伝えたいことが伝わるように、割付を考えている。【ワークシート】
8	学習したことをいかに、伝えたいことの魅力が伝わるように書き方を工夫して書こうとしている。	★進んで引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫しようとしている。(主)【ワークシート】
9 10	下書きを読み、よりよいリーフレットになるように推敲し、清書する。	★引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。(思)【リーフレット】
11	完成したリーフレットを読み合い、単元の振り返りを行うことができる。	★完成したリーフレットを読み合い、単元の学習の成果と学び方について振り返りを行っている。(主)【リーフレット・ワークシート】

【実施期間】令和2年10月7日(水)～10月23日(金)

【対象】厚木市立清水小学校 第6学年全4学級

(そのうち1学級で筆者が検証授業を実施)

【教科・単元名】国語科・伝統的な日本文化を発信するリーフレットを書こう

【言語活動】6年生に向けてリーフレットを書く

5 ルーブリックと検証授業

(1) 検証授業準備

「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準と評価の判断基準を定めるルーブリックの開発の手順は、『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』(国立教育政策研究所 2020)に示されている『「内容のまとまりごとの評価規準」を作成する際の基本的な手順』を参考にした(第3表)。

第3表 ルーブリック開発の手順

①	「知識・技能」「思考・判断・表現」の観点について新学習指導要領に示された目標及び内容を確認し、「内容のまとまりごとの評価規準」を設定する。「おおむね満足できる(B)」
②	①で設定した評価規準に沿って、「粘り強さ」を発揮させたい重点的な内容と「自らの学習の調整」が必要な言語活動(学習課題)を設定する。
③	①と②で設定した内容と関連付けて「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準を設定する。「おおむね満足できる(B)」
④	児童の実態に応じて、「十分満足できる(A)」と「努力を要する(C)」の評価の判断基準を設定する。

検証授業前に筆者が開発したルーブリック(第4図)を基に第6学年担当教員で評価方針の共有を行った。

※ ◎自らの学習を調整 ○粘り強い取組

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○複数の資料を読んで「知ったこと」をもとに過去の体験等を踏まえて、自分の「考えたこと」を記事に書くことができる。	○目的に応じた引用をしたり、図表や絵、写真などを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫している。 ○小見出しや表現等まで工夫して書くことができる。	◎学習の見通しをもって、改善を繰り返すなどして、よりよいリーフレットづくりをしている。 ○進んで目的に応じた引用をしたり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫しようとしている。
【内容のまとまりごとの評価規準】 新学習指導要領に示す各教科等の「各学年の内容」の項目		○他の2観点において重点とする内容 ○言語活動との関連
○本を読んで「知ったこと」「考えたこと」を記事に書くときに、教員の手助けを多く必要とする。	○自分の考えが書かれていない。	C評価の判断基準 ○引用したり、図表やグラフなどを用いたりすることをよしとしない。

第4図 開発したルーブリック(教員用)

第4表 「主体的に学習に取り組む態度」(抜粋)

	「主体的に学習に取り組む態度」	◎自らの学習の調整	○粘り強さ
A	◎学習の見直しをもって、改善を繰り返すなどして、よりよいリーフレットづくりをしようとしている。 ○進んで目的に応じた引用をしたり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫しようとしている。		
B	◎学習の見直しをもって、リーフレットづくりをしようとしている。 ○進んで引用をしたり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫しようとしている。		
C	◎リーフレットの完成だけにこだわり、内容が不十分である。 ○引用したり、図表やグラフなどを用いたりすることをしようとしな。		

また、所属校の第6学年担当教員からの聞き取りにおいて、児童の実態として、「よりよい表現や構成などを工夫し、自分の考えがしっかり伝わる文章を書く力に課題がある」とされていたため、よりよく書こうとする姿を期待し、評価の判断基準を設定した。

ルーブリックを活用することで、第6学年担当教員と単元終了時までの評価規準を共有し、更に単元計画シートを使用することで、ねらいとする評価規準と評価の判断基準が妥当であるかを確認することができた。

(2) 児童と教員とのルーブリックの共有(第4時)

単元で取り上げる言語活動のリーフレット作りが始まるタイミングで、児童に児童用ルーブリックを提示し、3観点それぞれの評価方針について共有を行った。また、A基準については、多様な実現状況があることから、記載してあるもの以外にも評価の判断基準が追加されることがあることを説明した。第5表は「主体的に学習に取り組む態度」の観点のみの抜粋である。児童には伝わりやすいように「主体的に学習に取り組む態度」ではなく、「よりよく」と「頑張る」の観点に分けて説明した。

第5表 共有した児童用ルーブリック(抜粋)

	◎よりよく	○頑張る
観 点 の 説 明	◎「学習の見直しをもって取り組む」「学習の振り返りをし、次の学習にいかす」「あきらめずによりよく書こうとする」 ○自分の考えたよさが伝わるように、引用したり、図表やグラフなどを使ったりする。	
A	◎学んだことをいかして、改善を繰り返すなどして、リーフレットづくりをしようとしている。 ○進んで、目的に合わせた引用をしたり、図表やグラフを使ったりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫しようとしている。	
B	◎学んだことをいかして、リーフレットづくりをしようとしている。 ○進んで引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫しようとしている。	

(3) 研究協議会

第8時に所属校全教員に検証授業を公開し、研究協議会を実施した。研究協議会では、前半に本研究の概要を説明し、後半にグループに分かれて「ルーブリックの活用は『主体的に学習に取り組む態度』の評価の手立てとして有効か」を協議の柱として、意見を交換した。作成するのが大変そうであるといった意見もあったが、本研究で注目した意見は次のとおりである。

- ・ルーブリックがあることで、基準が明確になる。
- ・児童にルーブリックを開示することで、児童が何を頑張ればよいか分かる。また、教師側も公平に評価をすることができ、共有できている安心感がある。

これらの意見から、ルーブリックを活用することは、先述した「評価の判断基準が曖昧な点がある」といった不安を解消する手立ての一つになると考える。また、

ルーブリックを教員と児童が共有することで、「公平に評価することができる」といった意見があることから、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の難しさを解消する手立てにもなると考えた。

(4) 評価検討会

評価検討会は第6表のとおり行った。

第6表 評価検討会の手順

	手順
3分	① 検討する観点とルーブリックを確認する。 (例)「主体的に学習に取り組む態度」
10分	② 自分のクラス分の学習成果物を、ルーブリックを基にA・B・Cグループに仕分ける。 ③ 判断に悩んだものは保留ゾーンに置く。
30分	④ 1度目の仕分けが終了したら、1クラスずつ保留ゾーンにある学習成果物を全員で検討して仕分ける。 ⑤ 仕分けをしながら、A「十分満足できる」成果とC「努力を要する」成果の記述語を記録者がルーブリックに書き足していく。 (※記述語…具体的な児童の姿や学習成果の特徴を示した記述を指す。)
10分	⑥ 「AとB」、「BとC」(評価の判断)を検討して、判断基準となる記述語または数量的な尺度を記入する。 ⑦ 他のクラス分も同様に保留ゾーンを仕分けし、必要に応じて記述語を加えて、ルーブリックを完成させる。
7分	⑧ 完成版のルーブリックの評価の判断基準を基に自分のクラス分のA・B・Cの仕分けを再確認する。 ⑨ 記録に残す評価として評価結果を名簿に記入する。
7分	⑩ 単元計画シートを基に指導を振り返り、単元計画シートに成果と課題を記入して次年度に引き継ぐ。

「主体的に学習に取り組む態度」の主な評価場面に設定していた第8時と第11時について、その時間の学習成果物と児童の具体的な学習の姿を基に評価をした。主に評価検討会の手順④に時間をかけて、A評価とするか、B評価とするか悩んだものについて、学習成果物を基に、授業中に観察した児童の姿を確認しながら検討を行った。そして、手順⑥において、先述した第4表のルーブリックに、A評価とC評価の判断基準をより具体化した児童の姿や学習成果の特徴の内容を書き加えた(第7表)。

第7表 具体化されたA評価の判断基準

	「主体的に学習に取り組む態度」	◎自らの学習の調整	○粘り強さ
A	【教員用ルーブリック】 () 内は児童用ルーブリックの文言 ◎学習の見直しをもって(学んだことをいかして)、改善を繰り返すなどして、よりよいリーフレットづくりをしようとしている。 ○進んで目的に応じた(合わせた)引用をしたり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫しようとしている。		
Aの判断基準をより具体化	【整理項目】 () 内は確認した児童の具体的な学習の姿と学習成果の内容 ①学習のゴールを意識して学習を進めていた。 (学習計画を意識して、情報収集を行ったり、リーフレット作りに取り組んだりしていた。) ②学んだことを次にいかそうとしていた。 (書き出しの工夫、体言止め、引用の使いなど学習したことを効果的に使おうとしていた。) ③よりよくしようと試行錯誤する姿が見られた。 (読み手への伝わりやすさを想定し、記事の推敲、全体の構成・割付の検討、載せる絵や写真の選択を繰り返していた。)		

具体化した内容を基に、学習の振り返り、学習成果物、検証授業での観察結果を照らし合わせて評価を行った。例えば、児童Aは次の振り返りの記述と、リーフレットの記事をよりよくしようとする書き直しが何度も確認されたことから、A評価とした。

- 【児童A 第8時振り返りの抜粋】
最初はただ下書きに引用を使って書いていただけだったのですが、友だちの下書きを読んで、読み手に言いかけるように書いた方が、6年生は興味をもってくれるかなと思い書き直そうと思いました。

共通の教員用・児童用ルーブリックを授業で活用す

ることで、検証授業後の評価検討会では他学級の児童の評価結果についても検討し、判断の相談をすることが可能となった。

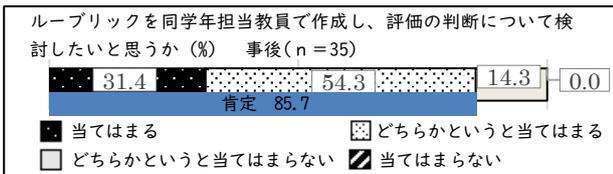
6 検証結果の分析と考察

(1) ルーブリックの開発・活用について

ここでは、同学年担当教員で作成したルーブリックを活用することの有効性について検証する。

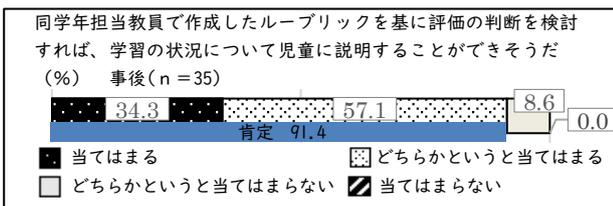
ア 研究協議会後の教員用質問紙調査の結果

「ルーブリックを同学年担当教員で作成し、評価の判断について検討したいと思うか」という質問項目において、肯定的な回答が85.7%であった(第5図)。



第5図 教員用質問紙調査結果①

また、「同学年担当教員で作成したルーブリックを基に評価の判断を検討すれば、学習の状況について児童に説明することができそうだ」の項目において、肯定的な回答が91.4%であった(第6図)。

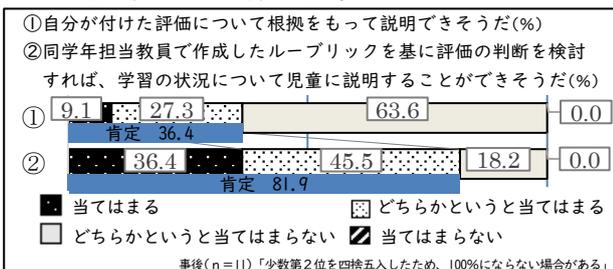


第6図 教員用質問紙調査結果②

以下は教員歴7年未満教員のその理由記述である。

- ・経験が浅いため、より多くの先生方と評価の判断をして評価の妥当性を得たいと思う。
- ・児童、保護者が納得できるようにするために、自分たちも自信をもって評価するために有効だと思う。

これらの記述から、教員歴7年未満教員(本研究では主に初任校しか経験していない教員を指す)ほど、自分の評価方法が正しいか、根拠をもって評価の判断ができていないか不安を抱いており、ルーブリックを学年で作成し、評価基準と評価の判断基準を確認し合うことの必要性を感じていることが分かった。さらに、教員歴7年未満教員の質問紙調査の結果を分析すると以下のことが分かった(第7図)。



第7図 教員用質問紙調査結果③

「主体的に学習に取り組む態度」の評価について「自分が付けた評価について根拠をもって説明ができそうだ」の項目について、肯定的な回答が36.4%であったが、「同学年担当教員で作成したルーブリックを基に評価の判断を検討すれば、学習の状況について児童に説明ができそうだ」の項目では肯定的な回答が81.9%となった。つまり、ルーブリックの作成と評価の判断の検討を行うことで、評価の妥当性・信頼性が確保され、肯定的な回答が増えたと考える。

また、以下は教員歴7年以上教員の記述である。

- ・学年で作成し、共有することで教師間の評価基準・基準を統一、またはその差を少なくすることができる。
- ・学年共通で評価のことで決めておけば、「これで大丈夫かな」と悩む時間が少なくなる。

これらの記述から、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の判断基準を定めたルーブリックを活用することは、同学年担当教員が同じ基準で評価することにつながり、「個人で悩む時間を少なくする」ことで、学習評価への負担軽減につながると考える。

イ 第6学年担当教員を対象にした評価検討会の結果

以下は、評価検討会の感想用紙からの意見である。

- ・ABCの基準を確かめ合えるのが良い。
- ・他のクラスのものを見えることで、自分のクラスの評価の参考にすることができた。
- ・基準がそろい、自信をもって評価できる。

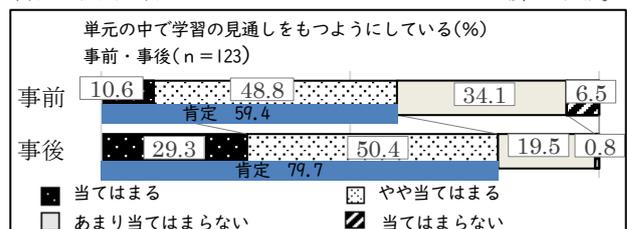
ルーブリックを活用し、評価の判断基準をより具体化しながら、評価結果の検討をすることが、信頼性を高める取組となった。つまり、評価の判断に悩んだ際に、個人の判断で評価を決定するのではなく、同学年担当教員の意見を取り入れ、評価結果の検討をしたことが、より信頼性の高い評価につながったと考える。

以上のことから、ルーブリックを作成し、2名以上の教員で評価結果を検討することが評価の妥当性・信頼性を高める有効な手段となると考える。

(2) ルーブリックを活用した検証授業について

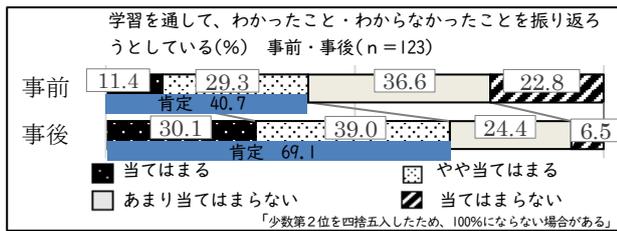
ここでは、ルーブリックを活用した指導が、児童の主体的に学びに向かう意識の向上に有効であったかを確認する。なお、児童対象の質問紙調査の結果は研究仮説の検証データには含めないものとする。

先述のルーブリック(第5表)を基に学習目標と評価方針を児童と共有した結果、検証授業後に行った質問紙調査で、「単元の中で学習の見通しをもつようになっている」の項目について、事前調査の結果と比べて、肯定的な回答が20.3ポイント上がっている(第8図)。



第8図 児童用質問紙調査①

さらに、「学習を通して、わかったこと・わからなかったことを振り返ろうとしている」の項目は肯定的な回答が28.4ポイント上がっている(第9図)。



第9図 児童用質問紙調査②

二つの質問紙調査の項目は、先述した第5表の観点の説明で共有した「学習の見通しをもって取り組む」「学習の振り返りをし、次の学習にいかす」に関連して、特に成果が確認された項目である。この結果から、ルーブリックの内容を共有し、児童と教員が共通の学習目標を目指したことで、指導と評価の一体化を促進できたと考えられる。ルーブリックを活用することは、児童の主体的な学びの意識を向上させるための手段として、有効であると考えられる。

研究のまとめ

1 研究の成果

「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行うために、評価の判断基準を定めたルーブリックを開発したことで、同学年担当教員で定めた共通の基準で評価することができた。また、ルーブリックを基に同学年担当教員で評価計画と指導のポイントを確認し、共通の児童用ルーブリックを児童に提示するまでの一連の評価活動を統一することができた。さらに、ルーブリックを活用した評価検討会を行うことで、評価の判断基準の根拠を具体的に確かめ合うことができた。

これらのルーブリックの開発・活用を行うことで、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の妥当性・信頼性を高めることができたと考えられる。

2 研究の課題と今後の展望

本研究は、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の妥当性・信頼性を高めるために、第6学年担当教員の協力により作成した評価規準と評価の判断基準を定めたルーブリックの開発・活用までの検証を行った。しかし、「主体的に学習に取り組む態度」の評価の妥当性・信頼性を更に高めていくためには、学年を越えて学校全体で評価の判断基準について検討していく必要があると考えられる。また、今回の検証では他領域や他教科においても有効に機能するかの検証はできていない。さらに、所属校の教員からルーブリック作成における時間の確保への不安の声もあった。

今後は、継続的に活用していくためにも、実践を蓄積することが必要である。また、ルーブリックを作成

する時間を確保するためにも、学年・教科を越えた校内研究との連携など、学校全体の教育計画の中で計画的に行うことが必要であると考えられる。

おわりに

本研究では「主体的に学習に取り組む態度」の評価の妥当性・信頼性を高めるための方策として、ルーブリックの開発・活用の実践を示した。学習評価の充実には、児童の学習改善、教員の指導改善に直結する。今後もよりよい学習評価の在り方を模索しながら、実践に取り組んでいく所存である。

最後に、本研究を進めるに当たり関わっていただいた所属校の教職員、児童をはじめとする全ての皆様に深く感謝を申し上げ、結びとしたい。

引用文献

- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afielddfile/2017/01/10/1380902_0.pdf (2020年11月30日習得)
- 文部科学省 2019 「小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について(通知)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1415169.htm (2020年11月30日習得)
- 田中耕治 2004 『学力と評価の“今”を読みとく学力保障のための評価論入門』日本標準
- 村山功 2020 「教育目標・内容、指導方法、学習評価の一体化に向けてー 新学習指導要領における『主体性』を中心にー」(『静岡大学教育実践総合センター紀要第30巻 p.198

参考文献

- 株式会社浜銀総合研究所 2018 「学習指導と学習評価に対する意識調査報告書」 p.21
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/080/siryu/_icsFiles/afielddfile/2018/09/05/1406428_9.pdf (2020年12月9日習得)
- 国立教育政策研究所 2020 「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料小学校国語」東洋館出版社 p.15
- 松下佳代 2007 「パフォーマンス評価ー子どもの思考と表現を評価するー」日本標準 p.48
- 山口陽弘 2013 「ルーブリック作成のヒントーパフォーマンス評価とポートフォリオ評価」(北大路書房『学習の支援と教育評価ー理論と実践の協同ー』) p.180